

文化・経済フォーラム滋賀

提言

2019年2月17日

地域とアートをつなぎ、新たな文化を育む

■問題意識～提言に向けて考えたこと

- ・滋賀に多くのアーティストが移住し創作しているのに、作品の発表は県外とは
- ・地域とアーティストがつながれば、何か新たなものが生まれないか
- ・地域とアーティストがウインウインとなるには、どうすればか

滋賀には多くのアーティストたちが暮らしていて、県外から移り住んだ美術家や工芸家も少なくありません。しかし、これらアーティストたちは滋賀を制作の場としながら、作品の発表や展示、販売などは大阪、京都であることがほとんどではないでしょうか。それではもったいない、というのが提言の動機です。

滋賀は古来、京大坂に近く、東国と都を結ぶ街道を多くの文化人が往来してきた「地の利」があります。もっと県外からのアーティストを受け入れる姿勢を示し、もともと地域で暮らすアーティストに目を向けて、創作活動を応援し取り込むことで、より豊かな地域文化を育むことにつながる。一方、アーティストは長い歴史と文化が根付く地域に向き合うことで新たな創作の可能性をつかむことになる。

そうした双方向の作用、そうした好循環をつくり出せないものか。地域に立脚しながら、知恵を働かせ、チャレンジしたいのです。

文化は、異質なものが出会い、対話することで互いに刺激され、新たな文化を生み出すのではないのでしょうか。

※アートとは…提言では、美術分野に限らず建築、音楽を含めた創作、表現活動を想定する

■提言への視点

アートへの眼差しは大きく変わってきています

もはや、美術館や応接間を飾る鑑賞の対象に限らない。形のある作品だけではない—今ではそう考えられています。

アートは、私たちの感性や意識を揺さぶり、新たな活力を生みだします

そういう観点から、アートと地域について考えました。アートは地域や、地域に暮らす私たちに新たな視点をもたらしてくれます。

そうした期待を込めた視座から、地域の暮らしや空間を見つめ直し、未来の地域社会の姿を思い描いて、提言を考えました。

■提言1～アートの可能性を地域に取り込む

#アートを私たちの手に

アートは元々、人々の手にありました。しだいに専門とする人たちが登場することになりますが、私たちの心の中には創作や表現への欲求が眠っているのではないのでしょうか。アートを単なる鑑賞の対象とするだけではつまらない。日常の仕事や生活の中で、私たち自身が創作や表現活動を楽しみたい。人間活動が細分化していく趨勢だからこそ、人本来の姿を取り戻すことが求められています。

#市民が創作、表現活動を楽しむ時間、場をつくりたい

市民が創作や表現活動、練習などに使える場をつくれませんか。
金沢市民芸術村には「アート」「ミュージック」「ドラマ」「マルチ」の各工房があり、市民に有料で貸しています。
市民がアートの受け手にとどまらないで、アートにチャレンジし楽しむ主体になるのです。

#アーティストとのコラボレーション（協働）を

市民の創作、表現活動に関わるアーティストがいてほしい。
アトリエや練習場で指導・助言してくれ、共同制作などで交流したい。
アーティストの創作、表現活動に、時には市民が参加したい。

#アートを通じて市民同士、市民とアーティストがつながるようなれば

市民とアーティストが連携してアートイベントを開催し、作品を通じて市民とアーティストが対話したい。

#市民、地域とアーティストが互恵（ウインウイン）の関係に

市民はアートフェアで作品を買うなどして経済的に応援したい。
創作活動では地元から材料調達し、大掛かりな制作を地元工場に発注すれば、地域の産業・経済は多少なりとも活性化します。

#アートを公共空間に

アートを美術館だけでなく、公園や駅前、街路、商業施設、そして学校などに置き、多くの人の目に触れるようにしたい。

#まちを再起動させる

企業や工場の誘致とは違った、アートがまちおこしの推進力となります。アートと地域経済のコラボ、アーティストと連携した製品開発やデザイン制作、地域観光の企画が期待されます。

#アートを地域の諸施策に組み入れる

子育てや老後のケアなど縦割りの福祉施設を、空間デザイナーや建築家、アーティストたちのアイデアを入れることで、多目的でオープンなヘルスケア施設につくり直すことも考えられます。

地域の「食」をデザイナーなどアートの目と発想で見つめ直して、伝統料理のブラッシュアップや新商品の開発につなげ、全国発信できないでしょうか。

地域の景観を、造園家や建築家を交えた新しい視点でとらえ直し、隠れていた価値の発掘や未来に向けた修景へとつなげたい。

■提言に向けての議論

提言に向けて、当フォーラムの企画推進員を中心に、議論の場を設け、先進地の現場を訪ねました。この提言は、そうした体験をもとに考えたものです。

7月28日、第11回文化ビジネス塾「移住アーティストと地域をつなぐ～理念より実践」を高島市安曇川町で開催

昨年度の「文化で滋賀を元気に！賞」を受賞した「風と土の交響プロジェクト」の中心メンバーである建築家の清水安治さん、原田将さん、高島に移住してきた陶芸家の立石善規さんから話を聞きました。このプロジェクトは2011年にスタート、高島の移住作家たちの工房を公開しています。地域住民や遠来の訪問者は作品を鑑賞するだけでなく、創作や生活の場に触れ、作家と対話することができます。工房を巡る料金1000円を取っています。清水さんたちは若い世代の移住のために安価な住宅づくりも始めています。

アーティストと地域をつなぐ実践例です。地域おこしのために、たまたまアートを活用したとのことですが、行政の助成頼みならず、地元企業の協賛や参加料を得て自立的に活動を継続していたことに注目しました。アーティストの生き方

にヒントをもらったという話、作家の方も地元の老人から人生経験を聞いて楽しかったという話が印象に残りました。

7月～9月に新潟県十日町市を中心に開かれた「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018」と「瀬戸内国際芸術祭」の会場である小豆島と女木島を訪問

瀬戸内国際芸術祭（瀬戸芸）の会期外でしたが、女木島の倉庫を改造した作品である映画館で上映会ツアーが企画され、参加しました。映画を鑑賞し、島に残された作品を見て回り、Uターンしたシェフの料理を楽しみました。瀬戸芸の総合ディレクター北川フラム氏の映画解説や、香川県の実行委員会幹部や移住スタッフの案内など、地元の力の入れ具合に感心しました。島の移住者が増えていると聞き、瀬戸芸が単なるアートイベントではなく、地域の再生につなげていることが分かりました。

越後妻有アートトリエンナーレでは、アーティストたちが過疎の地域と向き合い、住民と語り合っただけで創った作品を多く見ました。広い地域の200か所に作品を配置するのが目標。

それには住民の協力が欠かせません。「雪深い山里の廃屋に作品を残すためには、住民が雪下ろししないといけない。住民の支持がなければ作品は置かせてもらえない」とボランティアガイドから聞きました。一方で、アートは地域に何ができるか、が問われているということです。

11月24日、シンポジウム「アーティストと地域が生み出す新しい文化—その可能性と道筋」を大津市打出浜の「コラボしが21」で開催

現代美術家で京都造形芸術大学教授の椿昇さんが、「アートは地域に何ができるか」というテーマで講演。瀬戸内国際芸術祭の2013年、16年小豆島プロジェクトのディレクターを務め、地域を巻き込んだ取り組みをユーモアを交えて話しました。「観光より関係」を掲げ、都会との交通アクセスやネット環境の整備など戦略を立て、一過性のアートイベントではなく地域の持続可能性への寄与を考えたということです。都会の若者の大量投入、町役場の全職員参加、地場産業の製品デザイン開発、作品制作の地元発注を進め、アートと地域を絡み合わせました。地域の住民の意識は変わり、自信を持ち始めたといいます。

パネルディスカッションでは、椿さんに加えて、長浜芸術版楽市楽座運営委員会会長の笹原司之さん、草津市職員の松岡秀樹さん、彫刻家で当フォーラム企画推進員の藤原昌樹さんが発言。長浜市の「アートインナガハマ」、草津市の「アートフェスタくさつ」の取り組みが報告され、アートが地域に新たな活力を生む可能性が、シンポジウムを通じて浮かび上がってきました。

椿さんからは、アーティスト・イン・レジデンスの構想など、アートと経済を結びつける視点が提示されました。

12月9日、滋賀県公立文化施設協議会との共催でトップセミナーをびわ湖ホールで開催

佐々木雅幸・同志社大学経済学部特別客員教授による講演「文化芸術と地域活性化—創造都市と文化施設」で、アートの力で都市を再生させたスペイン・ビルバオやフランス・ナント、さらに伝統と市民の文化活動を結びつけた金沢市などの事例が紹介され、参考になりました。

アートと地域をつなぐ動きはすでに先進地で起きていて、成功例も見られます。理念でとどまらず、どうしたら持続可能な形で実現できるのか。戦略的・経済的な見通しとマネジメント力、そしてマンパワーが必要だと思い至りました。

■提言2 道筋を考える

#アートと地域をつなぐ組織をつくりたい

地域+市民+アーティスト+行政+企業の連携が欠かせません。
中間組織をつくる（昨年提言の金野幸雄氏の案を参照）。団体代表で構成される形式的な組織ではなく、実践的に動ける組織であること。
現場で活動し、専門的知見やノウハウ、広い人脈がある人が望ましい。

#担い手の育成とスカウト

アートとまちづくりのコーディネーターを育成します。
アートへの知識、理解だけでなく、地域や企業、行政へのアプローチができる人材が必要となります。
活動やイベントなどで収支を管理できるマネジメント力も求められます。
瀬戸内国際芸術祭のディレクターである北川フラム氏や椿昇氏のような、アートの枠にとどまらない活動がカギを握ります。
こうした人材は短期間に育成できないので、有望な人をスカウトしたい。
その活動を身近で学ぶことでマネジメント力のある人材が育つ。

#地域間のネットワークをつくる

それぞれの地域が個別に取り組むだけでなく、互いに連携、交流することで新たな可能性や発展性が生まれてきます。
情報交換やノウハウのやり取り、労力の支援、アーティストの紹介などを通じて、互いに力をつけることができるでしょう。
こうしたネットワークを機能させ、総合する力で全国に発信できるアートフェスティバルを実現できないでしょうか。

持続可能な仕組みが必要

「アートで飯が食える」ようにしないと長続きしません。地域でアーティストに活躍してもらうためには、経済的な支えが欠かせません。ただ働きのボランティアとしての扱いは、もうやめましょう。アートを「金持ちの道楽」のように見ているだけでは、市民に広がりません。行政や企業の助成に頼るだけでは、税金や収益の増減に左右されてしまいます。アートを市民が支えるという意識を高める必要があります。アートイベントや活動にかかるコストを、どうやって工面するのか。入場料や作品販売、ブランド商品開発や観光・飲食による収入などが、いま大規模アートイベントで実行されていて、厳しいマネジメントが求められています。こうした実践を参照して、地域で試みる必要があります。

現在の地域アートイベントを充実させる

足元の活動に目を向け、多方面から協力、サポートしていくことが大切です。ただ続けていけば良いというのではなく、少しずつでも新しさを加え、進化させていくようにしたい。

アーティスト・イン・レジデンス（滞在型創作活動）を

アーティストが地域に滞在し創作する姿に、市民は触れることができます。作品が地域に残り、アーティストとの交流が生まれることが期待されます。アーティストを通じて、県外や海外とつながります。とくに人口減と少子高齢化が深刻な滋賀県北部でつくりたい。

地域にアートセンターをつくり、県立の文化施設と連携する

アートセンターを地域につくり、市民の創作、表現活動の練習、発表の場にしたい。地域のアーティストや学校の美術・音楽・演劇の教員が参加、助言、指導する。県立近代美術館やびわ湖ホールは連携、サポートする拠点になってほしい。両施設には、地域とのつながりを強め、市民の創造・表現活動に関わっていくなど、外に開かれた新たな活動が求められます。そのためには人的・財政的な拡充が不可欠で、それだけに県の文化行政への姿勢が問われることとなります。

■地域とアートが繋がった光景をイメージする

村のはずれの古い家に、いつの間にか見知らぬ男が移り住むようになりました。神社の杜のすぐそばで、夜になると家の作業場からカチンカチンという音がして、ときおりピカッとせん光が漏れて見えました。そっと覗くと、わけのわからない物をつくっているのです。

私たち住民は怪しんで近づきませんでした。子どもたちは興味しんしん。遠巻きで作業を見ていると、男が声をかけ、鉄を溶接して小さなロボットのようなものをこしらえて、子どもたちに与えました。それから、子どもたちは男の作業場に行っては、そこらへんの木切れや小石などで何やらつくったり、絵を描いたりするようになりました。男は教えることはなく、「これは面白い」と子どもたちと一緒に喜んでいるだけでした。やがて作業場は、板壁いっぱいカラフルな絵が描かれ、木の小枝や鉄板が張り付けられて、周囲の目を引き付けるようになりました。

男は街では少しは名が知れた彫刻家で、大きな作品を制作するために広い場所を求めてやってきたのです。

子どもたちの喜ぶ様子を見て、村の若者たちが極彩色の作業場に集まるようになりました。それは、一風変わったよそ者の男に何かを感じたからでした。学校や会社で教えてくれない何かです。成績やお金、効率を追求して息苦しい社会とは縁のなさそうな生き方に、引かれたのかもしれませんが。創作している姿や作品にふれ、時おり男と話を交わすうちに、これまで見ていなかった世界に若者たちが気付くようになったようです。物差しは一つではなく、テレビで流されるのと違った、楽しさや笑い、喜びを心から感じるようになりました。鋭敏な若者は、社会の見方が変わり、これからの社会は経済や政治の視点だけでは限界だと思えるようになりました。男のそばに子どもたちが集まって、何かを創っている姿を見て、未来の社会に必要なのはアートの力ではないか、と感じたのです。

一方、男も考えていました。村の子どもや若者たちと触れ合ううちに、創作に打ち込むだけでいいのだろうか。村の古老から村のシキタリやナリワイを聞き、地域の歴史や自然に向き合うことで、創作に新しい地平が見えてきたというのです。

男と若者たちは秋祭りを復興させることを思いつき、新しい神輿をつくることにしました。祭りの由来や言い伝えを聞き取り、地域のアイデンティティを神輿に込めることにしました。さらに盆踊りやお囃子、音楽をつくろうと、男は街から知り合いのミュージシャンやダンサーを呼んで、若者たちとコラボすることしました。新旧融合の秋祭りとなりましたが、それはアートが結び付けた幸福な時間でした。

廃止された小学校が、村人が共有する記憶のコモンズ（入会地）ではないかと発想した男は、1年かけて私たち村人をインタビューして回り、ドキュメント映像にしました。上映会を小学校跡で催すことになり、私たちは傷んだ校舎を修繕し、男は知り合いのアーティストと記憶を基に教室の空間を作品にしました。上映会の後、旧校舎は村人たち

の歌や踊りの練習場になり、街のアーティストが滞在して創作するアトリエになりました。アーティストは農家に民泊し、村人たちが地元料理を出しました。都会のIT企業で働いていた若者がふるさとの変化を知り帰郷、「アーティスト・イン・レジデンス」としてインターネットで発信すると、海外のアーティストもやって来るようになりました。若者たちは起業し、村の身の丈に合った経済の循環をつくりました。

男の作業場に好き放題に絵を描いた子どもたちは、若者に成長し、どうしたら村をもっと楽しくできるか、とわいわい話しています。何年か前に男はどこかに旅立ち、そのまま戻ってきませんでした。悲しんだ若者たちは、感謝の気持ちを込めて男の像を創りました。男の言っていたことを思い起こして創っていたら、やっぱりわけの分からない像になりました。

—そんなことを、提言のあとに思い浮かべました。

文化・経済フォーラム滋賀

これまでの提言

- 2018年 地域文化を育む、新たな観光を創造する
- 2017年 世界遺産、無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取組みを
～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～
- 2016年 新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ
- 2015年 自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を
～“近江遺産”“近江八百八景”から日本遺産そして世界遺産へ～
- 2014年 滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、スポーツイベントと連携した開催へ
- 2013年 文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ
- 2012年 文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を